



著者プロフィール

加藤かな文（かとう・かなぶん）

昭和36年 愛知県生まれ
平成5年 「槐」 入会
岡井省二・児玉輝代に師事
平成7年 「槐」 同人
平成9年 第6回槐賞受賞
平成13年 「槐」 退会
「家」 創刊同人

現 在 「家」 編集発行人
俳人協会会員

〈句集『家』より転載〉〈2009年8月8日時点〉

『家』（自選15句）

加藤かな文

春の山好きなどころに並べ置く
薄氷のつめたき水に囲まるる
卒業の涙を笑ひ合ひにけり
こぼすもの多くて鳥の巢は光
菜の花の前を次々明るい水
忘れてもいいことばかり春の禽
夏祭つまらぬものを買ひにけり
巻きついて屋敷の咲く別の草
夕暮のさういふ色の石榴なり
とまりたきもの見つからぬ赤とんぼ
木枯や吾より出づる父の声
朝日から鳥の出てくる寒さかな
いつしんに降る雪のなか遊ぶ雪
雪のあとひたすら乾く桜の木
大寒や兎は菜屑こぼしつづけ